27 アルブレヒト・フォン・ローレツの研究 (1)

○小形[1] 利彦・エリッヒ[2]・ラブル

一八七四年（明治七）の来日以来、横浜・名古屋・金沢・山形の各地にドイツ医学を普及したことで知られるお雇い外国人医師アルブレヒト・フォン・ローレツ（Dr. Albrecht von Roretz）については、近年ようやくその功績が認められるようになった。その背景には、名古屋においては名古屋大学医学部九十年史・同大学百年史の編纂、山形においては山形市医師会史の編纂、ローレツ記念碑の建設などがあげられる。演者は以前よりローレツの業績に注目して研究を行ってきたが、一九八三年（昭和五十八）からは現地調査を開始し、以後は現地でローレツの研究をしているDr. Erich Rabl氏と共同で研究調査を続け今日に至っている。

ローレツの研究については、大きく来日以前と日本滞在の時期、帰国後の三つに区分されるが、それはさらにギムナジウム期、医学修業期（ウィーン大学入学後）、日本滞在の時期についても、いち旅行家の時期とお雇い外国人の時期などに細分される。それらの各時期の研究資料の所在は、オーストリア国内ではウィーンとホルン（Horn）、スロバキア共和国クレムジル（Kremsier）などで見ることができるが、子供がいなかったこともあってローレツ家の証言には時間的な誤りが認められる一方、重要ではあるがわずかな関係資料しか見い出すことができなかった。したがって、ローレツの年譜にしたがい関係機関の文書史料による裏付けの補足が必要であった。

ローレツに関した直接的研究史料は、ローレツ家が居住しているホルン、オーストリア国立・州立公文書館、最初に入学したカルクスブルク（Kalksburg）ギムナジウム、編入学したスロバキア共和国クレムジルギムナジウムにおいて入手でき、これらの史料を駆使することによって、ローレツの生い立ちはもちろん、ウィーン大学での医学修業のようす、来日の背景、帰国後のようすなどについての復元が可能となった。それはまた日本での活

躍に結びつく直接的な興味ある史料（資料）でもある。

これまでの研究成果の最大のものは、ローレツが最初からお雇い教師（医師）として来日したのではなく、博物学に興味を持つローレツが自費で来日したものであり、「オーストリーハンガリー公使館付医官」の肩書が自己申告により許可されたものであったことが判明したことである。またギムナジウムにおける学業期における留年なども判明した。またウィーン大学医学部におけるローレツの聴講届け（Study Book）によって、ローレツの医学履修のようすが明らかとなったが、それによればかなりの偏りがみられ、今後さらに詳細な検討を必要としている。さらに国内の研究調査によれば、来日後の翌年に実施した西日本旅行では高知において傷害事件を起こしており、日本とオーストリアの外交問題に発展したことも判明した。この他、ローレツ家が大切に保存しているものに「ローレツコレクション」があり、ローレツが生前に収集した貴重な写真数百点があり、それによって医学的分野以外のローレツ像を知ることができる。

ローレツが三十七歳で亡くなったことや日記類が未発見などの事情もあって、ローレツの業績については不明瞭な部分が少なくないが、これまでの研究成果のうち来日以前のローレツについて報告し、会員各位よりご指導ご助言をえられればと思うものである。

（1）日本大学山形高等学校

（2）オーストリア国ホルンギムナジウム